

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第60号 2007.1.31

発行
北海道ポーランド文化協会
〒011-0029
札幌市北区北29条西12丁目2
-16
佐光伸一
電話・FAX 011-727-1520

新会長ご挨拶

安藤 厚

前会長・灰谷慶三先生が亡くなられて早七カ月が過ぎました。この間、ポ文協は存亡の危機を迎えたといっても過言ではない状況でしたが、事務局をはじめ多くの会員の皆さまの協力により、ようやく運営委員会と総会を開き、新体制を整えることができました。

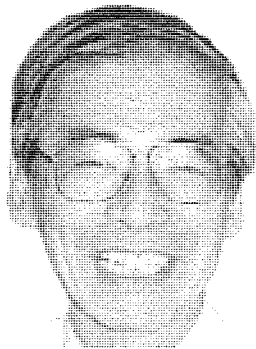
新たに会長をおおせつかり、微力を尽くさせていただきますことになりました。よろしくお願ひ申し上げます。

会長と申しましても、一人ではなができるわけでもありません。灰谷先生の奥様洋子さんをはじめ、ポーランドを愛し、ポ文

協を心にかけてくださる方々に、新たに、あるいは再び運営委員に加わっていただき、新しい一年の計画を立てることができました。

十一月のコンサート、年末の映画鑑賞会では、多くの古くからの会員の皆さまにご参加いただき、心強く感じました。

二月には料理講習会、三月に



は灰谷前会長を偲ぶ会が企画されています。多くの皆さまにご参加いただけますことを願っております。これらの催しが、新しい会員をお迎えする機会にもなれば幸いです。

会の運営としては、「ポーレ」を定期的に発行し、財政基盤を確保することが最大の課題です。例会の企画・希望を寄せていただければ、すこしずつ実現させていきたいと思えます。一年後を目処に創立二十周年記念の行事も考えたいと思えます。

ささやかな会ではありますが、ポ文協がポーランドに関心をもつ方、愛する方のつながりの絆として活動をつづけられれば幸いです。

今後ともご協力をよろしくお願ひ申し上げます。

(二〇〇七年一月)

シリーズ・ポーランドの映画監督

第一回 「ヤン・ヤクブ・コルスキ その一」

トマシュ・スタシンスキ

コルスキとは

「スクリーンで私が物語るの
はいつも歴史である。そこに
自分の世界と現実を映し出
す」（引用はすべて断りのな
い限り、コルスキ本人のこと
ばである）。

ヤン・ヤクブ・コルスキは
ポーランドでは、名字だけ聞
けば分かる、あるいはフィル
ムのわずか数コマを見ただけ
ですぐに誰のものだか識別で
きる数少ない映画監督のひと
りである。しかし彼の作品が

映画のスクリーンにデビュー
したのはようやく一九九三年
になってのことだった（独立
した映画監督としてコルスキ
は、一九八二年に短編映画に
よってデビューした。一九七
〇年代の終わりからカメラの
もとで仕事をしている。しか
し今年、コルスキ一家は映画
の世界に登場して百周年のお
祝いをした）。外国ではそれ
ほどの名声をまだ受けていな
いが、それでもやはり大きな
国際映画祭のすべてで彼の作
品は上演され、ロンドンと
ニューヨークでは彼の作品を

特集した上映会がようやく開
催された。さらに一九九五年
には彼の作品「幻想ラプソ
ディ」（「Grajały z Talerza
」）は東京国際映画祭で審査
員特別賞を受賞し（東京国際
映画祭 www.tiff-jp.net）、彼
の作品はとりわけ北野武の評
価を受けた。にもかかわらず
日本でコルスキの名前が実際
知られていないのはどういっ
た分けなのだろうか？一見し
てすぐ明らかのように、日本
ではアンジェイ・ワイダとク
シシュトフ・キエシロフス
キーを除けばポーランド映画
は未知の領域のままなので、

何も不思議ではない。しかし
それは残念なことである。コ
ルスキは日本人のものの見方
にぴったりと合うと思うから
である。

コルスキの映画

「農村風の装飾、舞台、言
葉遣いがそう思わせるかもし
れないが、私の映画は何人か
の批評家が言うような農村映
画ではない。ただ都会で映画
を作りたくないだけで、自
然、空間、地平線を眺めるの



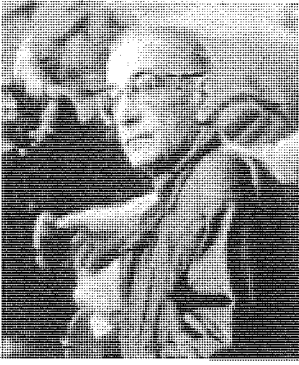
ヤン・ヤクブ・コルスキ



アンジェイ・ワイダ

が好きなのだ。」

共産主義の崩壊は、その危機によってポーランド映画史に逆説的な結果をもたらした。一方では検閲制度が撤廃され、作家に芸術の自由が帰ってきた。またその一方では、映画の資金も欠けており、作品のテーマも欠けており、芸術的手法も欠けていた。一九八九年まで映画制作者は社会主義の現実との闘いに主な努力を費やしており、どれほど多くのことが検閲を通過したかによって作品が評価されていた。キェシロフスキとワイダは「道徳的不安



クシシエトフ・キェシロフスキ



Jancio Wodnicki

の映画」（「道徳的不安の映画」について詳細は、http://pl.wikipedia.org/wiki/Kino_moralnego_niepokojuを参照のこと）において、ヴァレハとマフルスキ（例えばヴァレハの「Mysya」やマフルスキの「Kingsarz」）は、当時の現実を嘲笑する風刺コメディにおいて灰色の現実を表現したのだった。

しかしながら一九八九年以降は、手短に言えば、敵がいなかった。映画は自由になったが、どこへ行けばいいの

か、あまりよく分かっていなかった。古い世代の監督たちは、それまで語ることを許されなかった古い傷を掘り返し、キェシロフスキは西側へと活動拠点を移し、また完全に沈黙するものもあつた。なぜなら闘う映画は観客を完全に失ってしまったからである。若い監督の間では、ハリウッドからほとんどそのまま輸入した手法によるアクション映画が支配的だった。そしてまさにその時、まったくどこからでもなく、映画の世界に突然ヤン・ヤクブ・コルスキが現れたのだ。

一九九三年に彼の作品「Jancio Wodnicki」がスクリーンに登場した。この作品は、水によって病を治すという奇跡的な能力を手に入れ、神が自分に使命を与えたと考えて世界に出て行く年若い男について、素朴で、緩慢で、そ

れと同時にポエジーに溢れた物語である。しかしこの素晴らしい天賦の才能は徐々にその暗い一面を見せ始める。実のところ、これはポーランド映画史においてまったく例のない作品である。コルスキはラテンアメリカの「魔法のリアリズム」の手法を創造的に活用し、それをポーランドの土壌に移植したのだった。舞台は60年代のポーランドの農村に設定されている。しかしポーランドではまったく考えられないことだが、政治あるいは同時代の世界に対する言及がまったくなく、それにもかかわらず、この映画は観客や批評家を魅了し、すぐにコルスキに名誉と評価をもたらしたのである。（つづく…）

（訳・佐光伸一）

ポーランド旅行 珍道中 第一回

浜谷千里子



子供の頃から「ポーランド」に興味を持っていた私が念願叶いポーランドへ訪問したのは二〇〇三年九月でした。

クラクフに住む親日家の友人宅に一ヶ月ホームステイさせてもらい天候にも恵まれ（一度も雨が降らず暑かった）美しい街で美味しい料理やデザートの数々に舌つづみを打ち、毎日を楽しく過ごしました。また国内はもちろんのこと、国際列車に乗ってプ

ラハに行くなど小さな旅行もしました。

そして旅にはつきもののハプニング・失敗談・そして意外なところでカルチャーショックも受けました。

今回はそんな私のハプニングなどの一部を書きたいと思っています。

私のハプニングはポーランドに到着してすぐに起きました。チューリッヒ経由、乗客四名程の小さな飛行機でワルシャワに着き、入国審査がな

いので、乗客たちはパスポートチェックを済まし次々とゲートの外へ。

いよいよ私の番になりパスポートなど渡しがてら「Dziękuję」（こんにちは）と挨拶するとなんと係員は日本語で「こんにちは」。お互いビックリ。すると係員は何を思ったのか「もっとポーランド語を話して」と言うので私は知っている限りのキレイなポーランド語を話しました。でも係員は「もっと、もっ

と！！」と言うので困った私は「スラーチカ」（どういう意味かは心の広いポーランド人にお聞き下さい！）と汚い言葉を言うと爆笑になり、そこから下品な言葉や禁句までも連発して大爆笑させる事約一〇分。その間、迎えに来てくれていた友人家族がいつまでもゲートから出てこない私に何かあったのでは？と心配させてしまったことは言うまでもありません。

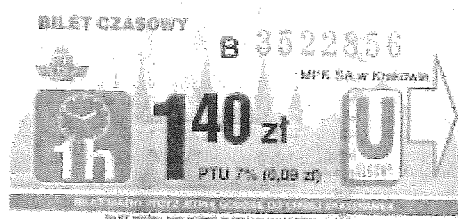
係員が理解のある人でよかったです。でなければ私は知らない人に言ったら身の安全が保障できないほどの発言をしていたのです。

飛行機の中で頭が痛くなるほど、寝まくっていた私だったので時差ボケすることなく、早速、友人と市電に乗り観光しまくる毎日でした。ポーランド語を話せない私は市電の切符を買うのもすべて友人任せです。まだ日本から

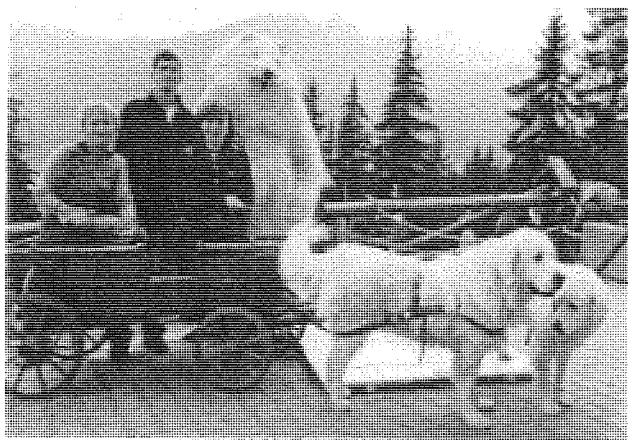
来て一週間くらいしか経ってない頃、いつものように友人と中心部へ行こうとすると、いつも買っていた二〇ズウォティ（当時、約七〇円）の切符ではなく、時計のマークがついた半額近い切符を渡されました。不思議に思い友人に聞いたら「時間制限がある」と言われ疑うこともなく市電に乗り込みました。

友人の買った切符は子供料金だったのです。「罰金五〇ズウォティ」（約一六五〇円）と聞いた時、まだこれといった買い物もしていなく日本とポーランドの物価の違いにハッキリとした感覚を持っていなかったせいもあり、すぐ日本円で計算し「安い」と判断しました。当然、次の駅で降ろされ罰金を払おうとすると「やっぱり二〇ズウォティで良い」と言われ訳も分からず放されました。

自分を責めている友人に「何で



五〇ズウォティが二〇ズウォティになったの？私が観光客だからサービスしてくれたの？」と聞くと友人は払った二〇ズウォティが罰金としてではなく彼等のポケットマネーになる事を教えてくれました。「何て汚い事をするんだ！！」とお金の事より彼等の行動に腹立ちました、



ポーランドでの生活に慣れてくると例え二〇ズウォティでも大金である事を後で大きく理解するようになりました。旅行前「とにかくスリには気をつける！！」と注意されていました。常時友人と一緒に財布を持たず現金は衣類のポケットなどに入れていたもので、スリの心配はありませんでした。でも友人と一緒にいるながらもちよつとでも一人になると老若男女問わず何度も「お金を恵んで下さい」「タバコを下さい」と声を掛けられていると次第に「またか」とうんざりしてきます。そんなある日、若い女性が近づいてきて「海外旅行に行く為お金を貯めているので協力して下さい」と言われた時には呆れ果て友人がいつものように追い払ってくれる前に思わず「働け！！」と怒鳴ってしまいました。（続く…）

ポーランドの道産子 第四回

エディータ・ジェブカ

「恐怖は大きな目をしてい
る」という、ことわざがポー
ランドにはあります。それは
「わたしたちが怯えるもの
は、実際にはそれほど恐ろし
いものではない」という意味
です。出産もその通りでし
た。時間という距離を持って
眺めると、この出来事も楽し
く思い出すことが出来ます。
しかしその時わたしたちは少
し怯えていたのも確かです。
というのも私たちにとって初
めての体験でしたし、そこに
何が待ち受けているか分から

なかつたからです。しか
しそれほど悪いものでも
ありませんでした。それ
は暖かい周りの雰囲気
と、結局使うことになった
麻酔のおかげです。出産
はとても長くかかりまし
た。全体で一六時間も続
きました。しかし痛みに
のたうつこともありませ
んでしたし、以前見た映
画で女優がしていたよう
に「痛い、痛い」と叫び
声をあげることもありま
せんでした。もし誰かが



この日の私たちをカメラに
収めたとしたら、それを見
た一体何人がそれが出産の
様子だと分かるでしょう
か。おしゃべりをしたり、
テレビを見たり、食事をし
たりしているうちに何時間
も過ぎました。麻酔を使う
とは、多くの女性の目には
私は弱い女性いと映ったこ

とでしよう。でも次に出産す
ることがあったとしてもこの
方法で産みたいと思います。

私たちの息子は、父親と同
じように、ちやうど真夜中に
生まれました。健康な子でし
た。でもポーランド人の子供
としては少し小さい二八〇〇
グラムでした。ポーランドで
は新生児の平均的な体重は三
三〇〇〜二五〇〇グラムなので
すが、日本の基準に従えば、
二八〇〇グラムというのは標
準で、何も心配することはな
いと知りました。

病院では六日過ぎしまし
た。日本では産後には普通そ
れくらい過ぎすからです。
ポーランドでは普通、二、三
日です。ポーランド人の私の
友達は、「そんなに長いこと
病院にいるの？」と驚いてい
ました。しかし私はもっと長
い間でも大丈夫でした。とい
うのもそこは安心感を与えて
くれて、専門的な手助けをし

てくれて、それに加えて主人が仕切りのある部屋にわたし

達と一緒に朝の八時から夜の九時までいれるからです。病院にいたとき主人は、区役所で子供の届けに関する手続きをすべてしてくれました。日本のお役所体質について多くのひとが非難していますが、私たちは嘆く理由などひとつもありませんでした。すべてが迅速に円滑に進みました。

私たちの息子にはMikoIai (ミコワイ) という名をつけました。この名前がとても気に入りました。真ん中にはポーランド語にしかない」という文字が入っていますが、将来はこのことが問題にはならないと希望を持っています。というのも父親も名前がこの同じ文字「で終わっています、そのことで文句は言っていないです。長い名前になかったのは意識してのことです。それが日本ではいろいろと面倒く

さいことになると思ったからです。

病院を出る時、看護婦さんたちは記念写真を撮影した後、両親にとって家での最初の夜は大変だろうけど、すべて大丈夫で何も大事はおこらないと言って私たちを安心させてくれました。ミコワイに関しては看護婦さんたちのおっしゃるとおり何も問題がありませんでした。しかしそれとはまったく別のことが起こりました。朝、恐ろしく大きい地震があったのです。北海道ではこのような地震は五〇年以上もなかったというぐらい大きなものだったらしいです。私たちと一緒にいてくれた主人のお母さんにとってこれは初めての経験でした。最初はどの地震もこんなものだと思います。たそうです。そんなことないと教えてあげると、ほっとしたようです。お母さんはわた

したちと一緒に六週間いてくれて、家事で私をとっても助けてくれました。掃除、洗濯、料理をしてくれて、お祝いの言葉を言い友達に来てくれた時には、おいしいポーランドのケーキを焼いてくれました。私はその時、休むことが出来て力を取り戻しました。

空港までお母さんを送りに行った時、このすべてが自分ののしかかってくる自分分りました。でもその時はすでに「自分で何とか出来るわ」という自信がありました。

(訳・佐光伸)

最近のポーランド ラファウ・ジェブカ編集
○経済 (Gospodarka)

●「ポーランド経済が上げ潮だ」
双子の総理大臣と大統領の人気の低いままだが、ポーランド経済が上げ潮だ。

●「渡英しても仕事が見つからず」
EU拡大後に多くのポーランド人がよりよい生活を求めて英国に移住。しかし、英国には来たものの、仕事が見つからず、収入がない

ためにホームレスとなってしまうポーランド移民が約三〇〇〇人もいる可能性が高い。

●「日本の企業がポーランドを選ぶ」
東芝がヴロツワフ郊外・コピエジュツェ、シャープがトルニで液晶テレビに必要な部品の工場を稼働した。JETROによると2006年に日本の資本金の企業が130社を超えてきた。

○文化 (Kultura)
●「鈴木さんが二位、ポーランドのコンクール」
ポーランド西部ボズナニで行われた第一三回ピエニアフスキ国際バイオリンコンクールで、桐朋女子高校音楽科二年の鈴木愛理さん(一七)が東京都出身が二位に入賞した。

○スポーツ (Sport)
●「ポーランド男子バレー世界二位」
日本で行われたバレー世界大会でブラジルに負けて二位。ホテルの子約がちゃんと入っていない、ちゃんとした場所で練習をさせない、テレビのカメラが日本人選手しか見せてくれない、日本のコーチは礼儀が正しくない、というようなクレームはポーランドのメディアに取り上げられる。因みに日本を批判する記事やニュースは非常に珍しい。

○面白ニュース (Ciekawostki)
●「新記録」
北西のポーランドのシチェン市で七、一三〇名の赤ちゃんが産まれた。六六名のカツベル君がとても元気な四人目の子供として誕生した。

提供：河北新報、FIRacing.jp、CNN Japan、ZAKZAK、東京新聞、ジャーニー、スポーツニッポン

「第五〇回例会・ピアノコンサート報告」

昨年一月四日(土)午後三時、「秋の午後のシヨパンコンサート」と題して、当協会主催のピアノコンサートが井関楽器ホールにて開催されました。気持ちの良い秋晴れの中、たくさんのお客様に



場して頂き、七五席の会場が満員になりました。今回は久しぶりの「チケット制」のコンサートでしたが、特に混乱もなく、無事に終わりました。今回は、シヨパンの全作品から出演者の方々に好きな曲を選んで頂きましたので、大変バラエティーに富んだプログラムとなりました。

いつものように三浦 洋さんの解説も加わり、秋の日の午後、シヨパンの名曲の数々を楽しみました。当協会では、今後も定期的にコンサートを企画してゆく予定です。テーマや内容についてご要望、またアイディアをお持ちの方は、どんどん事務局までお寄せ下さい。お待ちしております。





第五一回例会 「敬愛なるベートーヴェン」上映会

後援 シアターキノ

「第九」とアンナ、そしてポーランド派ホラント ①

三浦 洋

新作の映画「敬愛なるベートーヴェン」は、制作国がイギリスとハンガリーですが、監督のアグニエシカ・ホラントはポーランド人の女性監督です。パンフレットには「アニエシカ・ホラント」と書かれています。ポーランド語の発音に従ってアグニエシカと書きます。

私はこの作品を十一月に試写会で見たのですが、まず理屈抜きに面白い映画です。ストーリーの骨格は、ベートーヴェンが交響曲第九番、つま

り「第九」を初演する四日前に、アンナ・ホルツという二歳の女性が写譜役として音楽出版社からつかわされるところから始まります。作曲の心得があるアンナは次第にベートーヴェンに意見をいう女性になってゆき、「第九」の初演を助ける、という展開です。映画のクライマックスは、アンナの助けを借りてベートーヴェンが「第九」初演を指揮するシーンです。この筋書きはほとんどフィクションのようで、アンナは架

空の女性ですが、「第九」の写譜師は三人おりまして、その三人目の人物は未だに謎なので、ホラントはそこに目をつけ、アンナという女性を造形したようです。

では、実際の「第九」初演はどうだったのかといいますと、ベートーヴェンの研究者であった山根銀二の著書によれば、難聴ゆえに演奏終了に気付かなかったベートーヴェンを客席に振り向かせたのはウンガーという女性歌手だったそうです。しかし、この映



画ではこの女性をアンナに変えて、思いもよらない面白い物語を作ってみせてくれます。

さて、ここからが本題ですが、この映画は三つの見方ができるのではないかと思います。一つには、「第九」を中心に晩年のベートーヴェンを描いた映画という見方、二つめには作曲家を目指すヒロイン、アンナを描いたストーリーという見方、そして三番目には、アグニエシカ・ホラントが女性映画監督として、また、現代映画のポーランド派としての誇りをかけて撮った作品という見方です。

ベートーヴェンの人となりと晩年独特の作風

一つめの、ベートーヴェンを描いた映画という点では、一九九四年にアメリカで制作された「不滅の恋 ベートーヴェン」と比べてみるのが

できます。二つの映画の共通点は、ベートーヴェンを聖人君子扱いせず、俗人としてといますか、むしろ変人として描いている点です。果たして本当のベートーヴェンはどんな人だったのか、正確には誰もわからないわけですが、「敬愛なるベートーヴェン」では、芸術家の魂と俗人ぶりを併せ持つ人物をエド・ハリスが見事に演じています。ハリスはもともとスマートな俳優ですが、ベートーヴェンの役を演じるためにわざわざ特別の食事をつづけて太り、その上でピアノ、ヴァイオリン、指揮、楽譜を書く練習までして撮影にのぞんだそうです。ホラントの映画には何度も出演しているハリスですが、ひとときわ力のこもった演技になっています。

パレードという感じだったのに対し、「敬愛なるベートーヴェン」のほうでは「第九」以外に、ベートーヴェンが最晩年に作った風変わりな作品がエピソードをまじえて演奏されます。たとえば、最後のピアノソナタ第三二番や、とても長いフーガを持つ弦楽四重奏曲第一三番、七つの楽章がつづいて演奏される一四番などが映画に出てきます。これらの作品は初演の時から決して評判がよくなく、変わった作品と思われていたように、ロシアの作家オドエフスキーが「ベートーヴェンの最後の弦楽四重奏曲」という短編の中で取り上げています。実は、この短編が含まれている「ロシアの夜（ルースカヤ・ノーチ）」という短編集を、私は学生時代に故・灰谷慶三先生のご指導を受け、ロシア語で読んだことがあります。そのとき特に印象に残った

たのは、オドエフスキーがベートーヴェンになり変わった、「悲しければ悲しいほど、私は滅七の和音を付け加えたくなるのです」という台詞を書いていたことです。音楽にくわしかったオドエフスキーは、当時なかなか理解されなかったベートーヴェン晩年の作風を作曲家になりかわって説明してくれているわけです。映画の中ではベートーヴェンが作品を酷評されるシーンもでてきますが、晩年の作風について考えるヒントを与えてくれます。

そして、もう一つ、映画の軸になっているのが、ベートーヴェンが溺愛していた甥のカールとの関係です。甥のカールというのは、ベートーヴェンの弟カール（名前が同じなのでややこしいのですが）の子どもです。ベートーヴェンは弟が亡くなったときに、弟の妻であった女性と四年にわたる裁判までして甥のカールを奪い合いました。結局、裁判ではベートーヴェンが勝ち、カールを引き取ったのですが、カールとベートーヴェンの関係は決して良くなかず和が近づきました。この事実がストーリーに巧みに盛り込まれています。

第五二回例会のご案内

北海道ポーランド文化協会
 第五二回例会として「ポーランド料理教室「デザート篇」を開催いたします。前回大好評だったエディータ・ジェブカ先生に、今回はポーランドのケーキ作りを教えてくださいいただきます。当日は三時間ほどの時間を予定しています。

日時：二〇〇七年一月七日
 (土) 午後一時二〇分から
 場所：札幌エルプラザ (北区北八条西三丁目) 四F料理実習室

メニュー

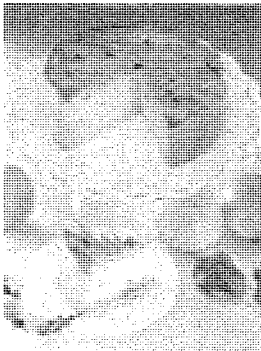
- ①セールニツク (ポーランド風チーズケーキ)
- ②シャルロットカ (ポーランド風りんごのパイ)

持ってくるもの

- ①参加費：五〇〇円 (材料費実費)
- ②エプロン
- ③三角巾
- ④布巾 (二枚)
- ⑤タッパなど (出来上がったものを自宅に持ち帰りたい方は持参下さい)

参加を希望される方はお電話かメールにてご連絡下さい。

北海道ポーランド文化協会事務局 佐光伸一
 電話〇九〇(六四四七)一七〇〇
 メール ssamitsu@hotmail.com



二〇〇六年度の総会が二〇〇六年一月二四日(金)午後六時三〇分より、北海道情報大学サテライト(中央区北三条西七丁目緑苑ビル四階)で開かれました。

総会
 開会のあいさつ
 議事

(一)二〇〇五―二〇〇六年度事業および決算報告、監査報告

(二)二〇〇七年度(二〇〇六年一月一日～二〇〇七年九月三〇日)事業計画(案)と予算(案)について

(三)二〇〇七年度役員について

(四)その他
 懇親会

開会挨拶と乾杯
 会食

閉会の挨拶
 乾杯―Sto lat

一 二〇〇五―二〇〇六年度

の事業報告および決算報告
 《主催事業》

(一)第五二回例会：『秋の午後のシヨパンコンサート』

お話：三浦洋さん
 ピアノ演奏：高橋健一郎さん、安藤むつみさん、渡辺卓さん

二〇〇六年一月四日(土)
 井関楽器ホール(参加者約八〇名)

*会計年度上は二〇〇七年度(二〇〇六年一月一日～二〇〇七年九月三〇日)事業として処理

《その他》
 ポール発行 第五一号(二〇〇六年九月二二日)

第20回総会 二〇〇六年一月二四日(金)北海道情報大学サテライト(参加者約二五名)

《二〇〇五―二〇〇六年度決算報告》【別表】をご覧ください。

二二〇〇七年度(二〇〇六年一月一日〜二〇〇七年九月三〇日)事業計画(案)および予算(案)

《主催事業》

料理講習会デザート篇(二月頃を予定) 講師:エディータ・ジェプカさん
講演会(夏頃) テーマ、講師未定

《後援事業》

映画鑑賞会(一二月二三日(土))

上映作品:『敬愛なるベーターヴェン』 お話 三浦洋さん

《その他》

会誌ポーレ発行(三回)

第21回総会:二〇〇七年一〇月頃

運営委員会:必要に応じて随時開催

《二〇〇七年度(二〇〇六年

一〇月一日〜二〇〇七年九月三〇日) 予算(案)》【別表】をご覧ください。

二〇〇七年度役員(案)について

顧問:遠藤道子・谷本一之

会長:安藤厚

副会長:小笠原正明

運営委員:薄井豊美・小笠原正明・

柏倉涼子・栗原朋子・越野剛・小林

暁子・小林美保・斎田道子・佐々木

保子・佐光伸一・霜田千代磨・中島

洋・鳴神雅史・灰谷洋子・三浦洋・

渡辺卓・ラファウ・ジェプカ

ポーレ編集委員:越野剛・小林美

保・佐光伸一・鳴神雅史・ラファ

ウ・ジェプカ

ピアノコンサート企画委員:安藤む

つみ・ウイリアムス美由紀・小林美

保・高橋健一郎・本田真紀子・渡辺

卓

監査委員:富山信夫・吉野悦雄

事務局長:佐光伸一

事務局委員:ラファウ・ジェプカ

《その他》

年度の呼称の変更について

来年度から「二〇〇六年」二〇〇七

年度(二〇〇六年一月一日〜二〇

〇七年九月三〇日)「改め」二〇〇

六年(二〇〇七年度(二〇〇六年一〇月一日〜二〇〇七年九月三〇日)とし、総会は第一回からの通し番号で「第〇回総会」とする。
創立二〇周年記念行事について

懇親会

出席者二五名

六名の札幌在住のポーランド人の皆さんを招待し、会員との楽しい交流のひとつを持ちました。



会費の納入はお済みですか?

2007年度(2006年10月~2007年9月分)

当会は、皆様からの年会費によって運営されています。上記の年度分の会費の納入を宜しくお願いいたします。

「ポーレ」編集委員会

越野剛・小林美保・佐光伸一

鳴神雅史・ラファウ・ジェプカ

Tel/Fax 011-727-1520

〔連絡先〕 佐光

《郵便振替口座》

02740 - 5 - 19735

北海道ポーランド文化協会

普通会員(年額) 3,000円

維持会員(年額1口) 5,000円

学生会員(年額) 1,500円

《会費振込銀行口座》

北洋銀行 大通支店

(普) 301-0605084

北海道ポーランド文化協会

事務局長佐光伸一

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 60 号 (2007 年 1 月)

目 次

安藤厚「新会長ご挨拶」	1
トマシュ・スタシンスキ〈ポーランドの映画監督 1〉「ヤン・ヤクブ・コルスキ (1)」	2
浜谷千里子「ポーランド旅行珍道中 (1)」	4
エディータ・ジェプカ「ポーランドの道産子 (4)」	6
〈第[50-2]回例会〉ピアノコンサート [秋の午後のショパンコンサート、2006.11.4] 報告	8
三浦洋〈第 51 回例会〉『敬愛なるベートーヴェン』上映会 ([協賛]:シアターキノ) ～ 『第九』とアンナ、そしてポーランド派ホルント (1) [2006.12.23] [報告]	9
〈第 52 回例会〉[ポーランド料理教室～デザート篇]のご案内 / [第 20 回 2006-2007 年度] 総会及び懇親会報告 [2006.11.24]	11